令和四年一月

漢詩鑑賞

【通釈】起句　酒に酔って、散り残りの梅のひと枝ふた枝を折り採って眺

　　　　　　　めやる。

　　　　承句　桃やが自分にほどよい季節になったと喜んでいる事に

　　　　　　　とやかくは言うまい。

　　　　転句　ただ、昔からのことだが、氷雪が厳しくはりつめる大地に、

　　　　結句　力いっぱい春をよみがえらせようと努めているのは結局誰

　　　　　　　なのか。（桃李ではない。この梅なのだ）

【語釈】　落梅　　花の散り落ちた梅の木

　　　　　殘梅　　ほとんど花の散った梅。散り残りの梅。

　　　　　不妨　　じゃまをする気はない。

　　　　　逢時　　よい季節にあう。よいチャンスにめぐりあう。

　　　　　向來　　これまで。従来。

　　　　　斡　　　まわす。つかさどる。ここではすすむと解す。

　　　　　竟　　　ついに。ここでは、結局の意に解す。

【押韻】　平声、支韻。枝、時、誰。

【解説】　陸游（一一二五－一二〇九）は､越州山陰（浙江省紹興）の人。

　　　　　字は。号は。范成大、楊萬里と共に南宋の三大詩人に挙げられている。

　　　　　当時南宋は北方金の圧迫に苦しんでおり、陸游は死ぬまで主戦論者で、後年憂国詩人と呼ばれている。

　　　　　官途について後の陸游の一生は、主戦派と和睦派の政争による浮沈のくりかえしであったが、晩年の二十年はほとんど政界から斥けられ、故郷紹興に自ら耕し国を憂えつつ八十五歳の生涯を終えた。

　　　　　陸游は梅を愛し多くの梅の詩を残しているが、この詩は紹興に隠退して二年目、作者六十八歳の年の作で、やや特異な作品となっている。

　　　　　詩は残梅に政争に敗れ斥けられている自ら及び主戦派を重ね、今をときめく和睦派を桃李に擬し、真に国運の回復に努めているのは我々だと主張する諷諭詩として読むのが妥当だと思われる。

　　　　　憂国詩人陸游を偲ばせる作品です。